

# 御法

## 渋谷栄一訳

### 第一章 紫の上の物語 死期間近き春から夏の物語

「第一段 紫の上、出家を願うが許されず」

紫の上、ひどくお患いになった。ご病気の後、とても衰弱がひどくおなりになって、どこそこがが悪いというのでなく、ご気分がすぐれない状態が長くなった。

たいして重病ではないが、年月が重なるので、頼りなさそうに、ますます衰弱をお増しになったのを、院がご心痛になること、この上ない。少しの間でも先立たれ申されることは、堪えがたくお患いになり、ご自身のお気持ちは、この世に何の不足なこともなく、気がかりな子供たちさえおいででないお身の上なので、無理に生き残っていたいお命ともお思いなされないのだが、長年のご夫婦の縁を別れ、ご悲嘆申させるだろうことだけが、人知れず心の中でも、何となく悲しく思われなさるのであった。来世のためにと、尊い仏事を数多くなさりながら、「何とかしてやはり出家の本願を遂げて、暫くの間でも生きている命の限りは、勤行を一途に行いたい」と、いつもお思いになりお願いなさるが、まったくお許し申し上げなさない。そうは言うものの、ご自分のお気持ちにも、そのようにご決心なさっていることなので、このように熱心に思っているしやる機会に促されて、一緒に出家生活に入ろうとお思いになるが、一度、出家をなさうたらば、仮にもこの世の事を顧みようとお思いにならず、来世では、一つの蓮の座を分け合おうと、お約束申し上げなされて、頼りにしているしやるご夫婦仲であるが、この世のまままで勤行なさる間は、同じ奥山であっても、峰を隔

て、お互いに顔を会わせない住まいで離れて生活することばかりをお考えになつていたので、このようにとても頼りない状態で病が篤くなつてゆかれるので、とてもお気の毒なご様子を、いよいよ出家しようという時機には捨てることができず、かえつて、山水の清い生活も濁つてしまひそう、ぐずぐずしていらつしやるうちに、ほんの浅い考えで、思うまま出家心を起す人々に比べて、すっかり後れを取つておしまひになりそつである。お許しがなくて、一存でご決心なさるのも、体裁が悪く不本意のようなので、この一事によつて、女君は、恨めしくお思い申し上げていらつしやるのであった。ご自身でも、罪障が浅くない身の上ゆえかと、気がかりに思わずにはいらつしやれないのであった。

「第二段 二条院の法華経供養」

長年、私的なご発願としてお書かせ申し上げなされた『法華経』一千部を、急いでご供養なさる。ご自身のお邸とお患いの二条院で催されるのであった。七僧の法服など、それぞれ身分に応じてお与えになる。法服の染色や、仕立て方をはじめとして、美しいこと、この上ない。だいたいのようなことに対しても、実にご莊嚴な法会を催された。

大層な催しには致されなかつたので、詳細な事柄はお教えなさらなかつたのに、女性のお指図としては行き届いており、仏道にまで通じていらつしやるお心のほどなどを、院はまことにこの上ない方だと感心なさつて、ただ大体のお飾り、何やかなことだけを、お世話なさるのであった。楽人、舞人などのことは、大将の君が特別にお世話を申し上げなされる。

帝、春宮、后宫たちをおはじめ申して、ご夫人方が、それぞれ御誦経、捧げ物など程度のことをご寄進なさるのでさえ所狭しなのに、それ以上に、その当時は、このご準備のご用をお務めしない人がないので、たいそう物々しいことがあれこれとある。いつのまに、とてもこのようにいろいろとご用意なさつたのであろう。なるほど、古い昔からの御願であるうか」と見えた。花散里と申し上げた御方、明石などもお越しになつた。東南の妻戸を開けていらつしやる。寢殿の西の塗籠であつた。北の廂に、御方々のお席は、襖障子だけを仕切つて設えてあつた。

「第三段 紫の上、明石御方と和歌を贈答」

三月の十日なので、花盛りで、空の様子なども、うららかで興味あり、仏のいらつしやる極楽浄土の有様が、身近に想像されて、格別である。信心のない人までが、罪障がなくなりそうである。薪こる行道の声も、大勢集い響き、あたりをゆるがすが、声が中断して静かになつた時でさえしみじみ寂しく思わずにはいらつしやれないのに、それ以上に、最近になつては、何につけても、心細くばかりお感じになられる。明石の御方に、三の宮を、使いにして、申し上げなされる。

「惜しくもないこの身ですが、これを最後として、薪の尽きることを思うと悲しうございます」

お返事は、心細い歌意のことは、後の非難も気にかつたのであろうか、当り障りのない詠みぶりであつたようだ。

「仏道へのお思いは今日を初めの日として、この世で願う仏法のために千年も祈り続けられることでしょう」

一晩中、尊い読経の声に合わせた鼓の音、鳴り続けておもしろい。ほのぼのと夜が明けてゆく朝焼けに、霞の間から見えるさまざまな花の色が、なおも春に心がとまりそうに咲き匂つていて、百千鳥の囀りも、笛の音に負けない感じがして、しみじみとした情趣も感興もここに極まるといった感じで、陵王の舞が急の調べにさしかかつた最後のほうの楽、はなやかに賑やかに聞こえるので、一座の人々が脱いで掛けていた衣装のさまざまな色なども、折からの情景に美しく見える。

親王たち、上達部の中でも、音楽の上手な方々は、技を尽くして演奏なされる。自分の上下に関わらず気持ちよさそうに、うち興じている様子を御覧になるにも、余命少ないと身をお思いになつていらつしやるお心の中には、万事がしみじみと悲しく思われなされる。

「第四段 紫の上、花散里と和歌を贈答」

昨日は、いつもと違つて起きていらつしやつたせいであるうか、とても苦しくて臥せつていらつしやる。長年、このような機会ごとに、参集して音

楽をなされる方々のご容貌や態度が、それぞれの才能、琴笛の音色をも、今日が見たり聞いたりなされる最後になるだろう、とばかりお思いなされるので、格別に目にもとまらないはずの人達の顔も、しみじみと一人一人に目が自然とお止まりになる。

それ以上に、夏冬の四季折々の音楽会や遊びなどにも、何となく張り合う気持ちは、自然と沸き起こつて来るようであるが、やはりお互いに親しくあつていらつしやる御方々は、誰もみな永久に生きていらつしやれる世の中ではないが、まず自分独りが先立つて行くのを考え続けなされると、ひどく悲しいのである。

法会が終わつて、それぞれお帰りになろうとするのも、永遠の別れのように思われて惜しまれる。花散里の御方に、

「これが最後と思われまます法会ですが、頼もしく思われます。生々世々にかけてと結んだあなたとの縁を」

お返事は、

「あなた様と御法会で結んだ御縁は未来永劫に続くでしょう。普通の人には残り少ない命とて、多くは催せない法会でしょうとも」

引き続き、この機会に、不断の読経や、懺法などを、怠りなく、尊い仏事の数々をおさせになる。御修法は、格別の効験も現れないで時が過ぎたので、いつものことになつて、引き続きしてしかるべきあちらこちら、寺々においておさせになつた。

「第五段 紫の上、明石中宮と対面」

夏になつてからは、いつもの暑さでさえ、ますます意識を失つておしまいにになりそうな時々が多かつた。どこといて、特に苦しんだりなさらないご病状であるが、ただたいそう衰弱した状態におなりになつたので、いかにも病人めいてたいそうにお悩みになることもない。伺候している女房たちも、この先どうおなりになるのだろうか、と思うにつけても、もう目の前がまっくらになつて、もつたいなくも悲しいご様子と拝する。

こうした状態ばかりでいらつしやるので、中宮が、この二条院に御退出あそばされる。東の対に御滞にあそばす予定なので、こちらでお待ち申し

上げていらつしやる。儀式など、いつもと変わらないが、この世の作法もこれが見納めだろうなどとばかりお思いになると、何かにつけても悲しい。名対面をお聞きになつても、あれは誰、これは誰などと、耳を止めてついでお聞きになる。

上達部なども大勢供奉なさつていた。久しく御対面ならなかつたので、珍しくお思いになつて、お話をこまごまと申し上げなさる。院がお入りになつて、

「今夜は、巢をなくした鳥の思いで、まうたくぶざまなさまですね。退出して寝るとしよう」

と言つて、お帰りになつてしまつた。起きていらつしやるのを、嬉しいとお思いになるのも、まことにはかないお慰めである。

「別々のお部屋にいらつしやつたのでは、あちらにお越しあそばすのも恐れ多いことです。お伺いすること、それもできにくくなつてしまいましたので」と言つて、暫くの間はこちらにいらつしやるので、明石の御方もお越しになつて、心のこもつた静かなお話などをお取り交わしなさる。

### 「第六段 紫の上、匂宮に別れの言葉」

紫の上は、ご心中にお考えになつていらつしやることがいろいろと多くあるが、利口そつに、亡くなつた後はなどと、お口にされることもない。ただ世間一般の世の無常な有様を、おつとりと言葉少なでありながらも、並々ではないおつしやりようをなさるご様子などを、言葉にお出しになるよりも、しみじみと何か心細いご様子は、はつきりと見えるのであつた。宮たちを拝見なさつても、

「それぞれの将来を、見たいものだとお思い申し上げていましたのは、このようにはかなかつたわが身を惜しむ気持ちがあつていたからでしょうか」と言つて、涙ぐんでいらつしやるお顔の美しさ、素晴らしく見事である。

「どうしてこんなふうにはかりお思いでいらつしやるのだらう」とお思いになると、中宮は、思はずお泣きになつてしまつた。縁起でもない申し上げようはなさらず、お話のついでなどに、長年お仕えし親しんできた女房たちで、特別の身寄りがなく気の毒そうな、この人、あの人を、

「私が亡くなりました後に、お心をとめて、お目をかけてやつて下さい」などとだけ申し上げなさるのであつた。御読経などのために、いつものご座所にお帰りになる。

三の宮は、大勢の皇子たちの中で、とてもかわいらしくお歩きになるのを、ご気分の好い間には、前にお座らせ申されて、人が聞いていない時に、「わたしが亡くなつてからも、お思い出しになつてくださいますか」とお尋ね申し上げなさると、

「きつとごとも悲しいことでしょう。わたしは、御所の父上よりも母宮よりも、祖母様を誰よりもお慕い申し上げますので、いらつしやらなくなつたら、機嫌が悪くなりますよ」

と言つて、目を拭つてこまかしていらつしやる様子、いじらしいので、ほほ笑みながらも涙は落ちた。

「大人におなりになつたら、ここにお住まいになつて、この対の前にある紅梅と桜とは、花の咲く季節には、大切に鑑賞なさい。何かの折には、仏前にもお供えください」

と申し上げなさると、ごくりとつなずいて、お顔をじつと見つめて、涙が落ちそうなので、立つて行つておしまいになつた。特別に引き取つてお育て申し上げなつたので、この宮と姫宮とを、途中でお世話申し上げることができないままになつてしまふことが、残念にしみじみとお思いなさるのであつた。

### 第二章 紫の上の物語 紫の上の死と葬儀

#### 「第一段 紫の上の部屋に明石中宮の御座所を設ける」

ようやく待つていた秋になつて、世の中が少し涼しくなつてからは、ご気分も少しはさわやかになつたようであるが、やはりどうかすると、何かにつけ悪くなることもある。といつても、身にしみるほどに思われなさる秋風ではないが、涙でしめりがちな日々をお過ごしになる。

中宮は、宮中に参内なさつとすのを、もう暫くは御逗留をとも、申し

上げたくお思いになるが、差し出がましいような気がし、宮中からのお使いがひつきりなしに見えるのも厄介なので、そのようにはお申し上げなからず、あちらにもお渡りになることができないので、中宮がお越しなされた。「恐れ多いことであるが、いかにもお目にかからずには張り合いがないということ、こちらに御座所を特別に設えさせなされる。すっかり瘦せ細うていらつしやるが、こうしても、高貴で優美でいらつしやることの限りなさま一段と素晴らしく見事である」と、今まで匂い満ちて華やかでいらつしやうた女盛りは、かえうてこの世の花の香にも喩えられていらつしやうたが、この上もなく可憐で美しいご様子で、まことにかりそめの世と思つていらつしやる様子、他に似るものもなくおいたわしく、何となく物悲しい。

「第二段 明石中宮に看取られ紫の上、死去す」

風が身にこたえるように吹き出した夕暮に、前栽を御覧になろうとして、脇息に寄りかかつていらつしやるのを、院がお渡りになつて拝見なつて、今日は、とても具合好く起きていらつしやいますね。この御前では、すっかりご気分も晴れ晴れなされるようですね」

と申し上げなされる。この程度の気分の好い時があるのを、まことに嬉しいとお思い申し上げていらつしやるご様子を御覧になるのも、おいたわしく、「とうとう最期となつた時、どんなにお嘆きになるだろう」と思つと、しみじみ悲しいので、

「起きていると見えますのも暫くの間のこと。ややもすれば風に吹き乱れる萩の上露のようになわたしの命です」

なるほど、風にひるがえつてこぼれそつなのが、よそえられたのさえ我慢できないので、お覗きになつても、

「どうかすると先を争つて消えてゆく露のようにはかない人の世に、せめて後れたり先立つたりせず一緒に消えたいものです」

と言つて、お涙もお拭いになることができない。中宮、

「秋風に暫くの間も止まらず散つてしまふ露の命を、誰が草葉の上の露だけと思つてしょうか」

と詠み交わしなされる「器量、申し分なく、見る価値があるにつけても、こ

うして千年を過ごしていたいものだ」と思われなされるが、思うにまかせないことなので、命を掛け止めるべきがないのが悲しいのであつた。

「もつお帰りなさいませ。気分がひどく悪くなりました。お話にもならないほどの状態になつてしまつたとは申しながらも、まことに失礼でございます」

と言つて、御几帳引き寄せてお臥せりになつた様子が、いつもより頼りなさそうにお見えなので、

「どうあそばしましたか」

とおつしやうて、中宮は、お手をお取り申して泣きながら押し上げなされると、本当に消えてゆく露のような感じがして、今が最期とお見えなので、御誦経の使者たちが、数えきれないほど騒ぎだした。以前にもこうして生き返りなされたことがあつたのと同じように、御物の怪のしわざかと疑いなさうて、一晩中いろいろな加持祈祷のあらん限りをし尽くしなさうたが、その甲斐もなく、夜の明けきるころにお亡くなりになつた。

「第三段 源氏、紫の上の落飾のことを語る」

中宮もお帰りにならず、こうしてお看取り申されたことを、感慨無量にお思ひあそばす。どなたもどなたも、当然の別れとして、誰にでもあることとお思ひなされず、又とない大変な悲しみとして、明け方のほの暗い夢かとお惑いなされるのは、言うまでもないことであるよ。

しつかりとした人はいらつしやらなかつた。伺候する女房たちも、居合わせた者は、全て分別のある者はまつたくいない。院は、誰よりもお気の静めようもないので、大将の君がお側近くに参上なさうているのを、御几帳の側にお呼び寄せ申されて、

「このように今はもう臨終のようなので、長年願つていたこと、このような際にその願いを果たせずに終わつてしまふことがかわいそうだ。御加持を勤める大徳たち、読経の僧なども、皆声を止めて帰つたようだが、そうはいつても、まだ残つている僧たちもいるだろう。この現世のためには何の役にも立たないような気がするが、仏の御利益は、今はせめて冥途の道案内としてでもお頼み申さねばならないゆえ、剃髪するよう計らいなさい。

「適当な僧で、誰が残っているか」

などとおっしゃるご様子、気強くお思いのようであるが、お顔の色も常とは変わって、ひどく悲しみに堪えかね、お涙の止まらないのを、無理もないことと悲しく押し上げなされる。

「御物の怪などが、今度も、この方のお心を悩ませようとして、このようになるとなるもののようにございますから、そのようなことではいらつしやいませう。それならば、いずれにせよ、御念願のことは、結構なことでございませう。一日一夜でも戒をお守りになりましたら、その効は必ずあるものと聞いております。本当に息絶えてしまわれて、後から御髪だけをお下ろしなさつても、特に後世の御功德とはおなりではないでしょうから、目の前の悲しみだけが增えるようで、いかがなものでございますか」

と申し上げなされて、御忌みに籠もつて伺候しようとするお志があつて止まつている僧のうち、あの僧、この僧などをお召しになつて、しかるべきことどもを、この君がお命じになる。

#### 「第四段 夕霧、紫の上の死に顔を見る」

長年、何やかやと、分不相応な考えは持たなかつたが、いつの世にか、あの時同様に拝見したいものだ。かすかにお声さえ聞かなかつたことよ、などと、忘れることなく慕い続けていたが、声はとうとうお聞かせなさらないで終わつたようだが、むなししい御亡骸なりとも、もう一度拝見したい気持ちか叶えられる折は、ただ今の時以外にどうしてあるう」と思つと、抑えることもできずつい泣けて、女房たちで、側に伺候する人たちが泣き騒ぎおろおろしているのを、

「静かに。暫く」

と制止するふりして、御几帳の帷子を、何かおっしゃるのに紛らして、引き上げて御覧になると、ほのぼのと明けてゆく光も弱々しいので、大殿油を近くにかかけて拝見なされると、どこまでもかわいらしげに、立派で美しく見えるお顔のもつたいなさに、この君がこのように覗き込んでいらつしやるのを目にしながらも、無理に隠そうとのお気持ちも起らないうつである。

「いるのです」

と言つて、お袖を顔におし当てていらつしやる時、大将の君も、涙にくれて、目も見えなされないのを、無理に涙を絞り出すように目を開いて拝見すると、かえつて悲しみが増してたとえようもなく、本当に心もかき乱れてしまひそうである。御髪が無造作に枕許にうちやられていらつしやる様子、ふさふさと美しく、一筋も乱れた様子はなく、つやつやと美しいうな様子、この上ない。

灯火がたいそう明るいので、お顔色はとても白く光るようで、何かと身づくろいをしていらつしやつた、生前のご様子よりも、今さら嘆いても嘆かないのない、正体のない状態で無心に臥せつていらつしやるご様子が、一点の非の打ちどころもないと言つのも、ことさらめいたことである。並一通りの美しさどころか、類のない美しさを拝見すると、死に入ろうとする魂がそのままこの御亡骸に止まつていてほしい」と思われるのも、無理というものであるよ。

#### 「第五段 紫の上の葬儀」

お仕え親しんでいた女房たちで、気の確かな者もないので、院が、何事もお分かりにならないように思われなされるお気持ち、無理にお静めになつて、ご葬送のことをお指図なされる。昔も、悲しいとお思いになることを多くご経験なされたお身の上であるが、まことにこのようにご自身でもつてお指図なされることはご経験なさらなかつたことなので、すべて過去にも未来にも、またとない気がなされる。

そのまま、その当日に、あれこれしてご葬儀をお営み申し上げる。所定の作法があることなので、亡骸を見ながらお過しになるといふこともできないのが、情けない人の世なのであつた。広々とした広い野原に、いっばいに人が立ち込めて、この上もなく厳めしい葬儀であるが、まことにあつけない煙となつて、はかなく上つていつておしまひになつたのも、常のことであるが、あつけなく何とも悲しい。

地に足が付かない感じで、人に支えられてお出ましになつたのを、押し上げる人も、あれほど威厳のあるお方が」と、わけも分からない下衆まで

泣かない者はいなかった。ご葬送の女房は、それ以上に夢路に迷ったような気がして、車から転び落ちてしまいそうになるのに、手を焼くのであった。

昔、大将の君の御母君がお亡くなりになった時の暁のことを思い出しながらも、あの時は、やはりまだ物事の分別ができたのであろうか、月の顔が明るく見えたが、今宵はただもう真暗闇で何も分からないお気持ちでいらっしやう。

十四日にお亡くなりになって、葬儀は十五日の暁であった。日はたいそう明るくさし昇って、野辺の露も隠れたところなく照らし出して、人の世をお思い続けなされると、ますます厭わしく悲しいので、先立たれたとて、何年生きられようか。このような悲しみに紛れて、昔からのご本意の出家を遂げたく、お思いになるが、女々しいとの後の評判をお考えになると、この時期を過ごしてから」とお思いなさるにつけ、胸に込み上げてくるものが我慢できないのであった。

### 第三章 光る源氏の物語 源氏の悲嘆と弔問客たち

#### 「第一段 源氏の悲嘆と弔問客」

大将の君も、御忌みに籠もりなされて、ほんのちよつとも退出なさらず、朝夕お側近くに伺候して、痛々しくうちひしがれたご様子を、もつともなことだと悲しく押し上げなされて、いろいろとお慰め申し上げなされる。

野分めいて吹く夕暮時に、昔のことを思い出し出しながら、かすかに拝見したことがあったことよ」と、恋しく思われなされると、また、最期の時が夢のような気がした」など、心の中で思い続けなされると、我慢できなく悲しいので、他人にはそのようには見られまいと隠して、

#### 「阿彌陀仏、阿彌陀仏」

と繰り返さる数珠の数に紛らわして、涙の玉を隠していらっしやるのであった。

「昔お姿を拝した秋の夕暮が恋しいのにつけても、御臨終の薄暗がりの中でお顔を見たのが夢のような気がする」

のが、その名残までがつらいのであった。尊い僧たちを伺候させなされて、決められた念仏はいうまでもなく、法華経など読経させなされる。あれこれとまた実に悲しい。

寝ても起きても、涙の乾く時もなく、涙に塞がって毎日をお送りになる。昔からご自身の様子をお思い続けると、

「鏡に映る姿をはじめとして、普通の人とは異なつたわが身ながら、幼い時から、悲しく無常なわが人生を悟るべく、仏などがお勧めになつたわが身なのに、強情に過ごしてきて、とうとう過去にも未来にも類があるまいと思われる悲しみに遭つたことだ。今はもう、この世に気がかりなこともなくなつた。ひたすら仏道に赴くに支障もないのだが、まことにこのように静めようもない惑乱状態では、願っている仏の道に入れないのでは」と気が咎めるので、

「この悲しみを少し和らげて、忘れさせてください」と、阿彌陀仏をお念じ申し上げなされる。

#### 「第二段 帝、致仕大臣の弔問」

あちらこちらからのご弔問は、朝廷をはじめ奉り、型通りの作法だけでなく、たいそう数多く申し上げなされる。ご決意なされてお気持ちとしては、まったく何事も目にも耳にも止まらず、心に掛りなされること、ないはずであるが、人から惚けた様子に見られまい。今さらわが晩年に、愚かしく心弱い惑乱から出家をした」と、後世まで語り伝えられる名をお考えになるので、思うに任せない嘆きまでがお加わりなされていらっしやるのであった。

致仕の大臣は、時宜を得たお見舞いにはよく気のつくお方なので、このように世に類なくいらした方が、はかなくお亡くなりになつたことを、残念に悲しくお思いになつて、とても頻繁にお見舞い申し上げなされる。

「昔、大将の御母堂がお亡くなりになつたのも、ちよつごこの頃のことであつた」とお思い出しになると、とても何となく悲しくて、

「あの時の、あの方を惜しみ申された方も、多くお亡くなりになつたな。死に後れたり先立つたりしても、大差のない人生だな」

などと、ひっそりとした夕暮に物思いに耽っていらつしやる。空の様子も哀れを催し顔なので、「ご子息の蔵人少将を使いとして差し上げなさる。しみじみとした思いを心をこめてお書き申されて、その端に、

「昔の秋までが今のような気がして、涙に濡れた袖の上にもまた涙を落としています」

お返事、

「涙に濡れていますことは昔も今もどちらも同じです。だいたい秋の夜といふのが堪らない思いがするのです」

何事も悲しくお思いの今のお気持ちのままの返歌では、待ち受けなさつて、意気地無しと、見咎めなさるにちがいない大臣のご気性なので、無難な体裁にと、

「度々の懇ろな御弔問を重ねて頂戴しましたこと」

とお礼申し上げなさる。

「薄墨衣」とお詠みになつた時よりも、もう少し濃い喪服をお召しになつていらつしやつた。世の中に幸い人で結構な方も、困つたことに一般の世間の人から妬まれ、身分が高いにつけ、この上なくおごり高ぶつて、他人を困らせる人もあるのだが、不思議なまで、無縁な人々からも人望があり、ちよつとなさることに、どのようなことでも、世間から誉められ、奥ゆかしく、その折々につけて行き届いており、めつたにいらつしやらないご性格の方であつた。

さほど縁のなさそうな世間一般の人でさえ、その当時は、風の音、虫の声につけて、涙を落とさないう人はいない。まして、ちよつとでも拝した人では、悲しみの晴れる時がない。長年親しくお仕え馴れてきた人々、寿命が少しでも生き残っている命が、恨めしいことを嘆き嘆き、尼になり、この世を離れた山寺に入ることなどを思い立つ者もいるのであつた。

### 「第三段 秋好中宮の弔問」

冷泉院の後の宮からも、お心のこもつたお便りが絶えずあり、尽きない悲しみをあれこれと申し上げなさつて、

「枯れ果てた野辺を嫌つてか、亡くなられたお方は、秋をお好きにならなかつ

たのでしようか。今になって理由が分かりました」

とあつたのを、何も分からぬお気持ちにも、繰り返し、下にも置きがたく御覧になる。「話相手になれる風情ある歌のやりとりをして気を慰める人としては、この中宮だけがいらつしやつた」と、少しは悲しみも紛れるようにお思い続けても、涙がこぼれるのを、袖の乾く間もなく、返歌をなかなかお書きになれない。

「煙となつて昇つていった雲居からも振り返つて欲しい。わたしはこの無常の世にすっかり飽きてしまいました」

お包みになつても、そのまま茫然と、物思いに耽っていらつしやる。

しつかりとしたお心もなく、自分ながら、ことのほかに正体もないさまにお思い知られることが多いので、紛らわすために、女房のほうにいらつしやる。

仏の御前に女房をあまり多くなくお召しになつて、心静かにお勤めになる。千年も一緒にとお思いになつたが、限りのある別れが実に残念なことであつた。今は、極楽往生の願いが他のことに紛れないように、来世をと一途にお思い立ちになられる気持ち、揺ぎもない。けれども、外聞を憚つていらつしやるのは、つまらないことであつた。

御法要の事も、はつきりとお取り決めなさることもなかつたので、大将の君が、万事引き受けてお嘗みなさるのであつた。今日が最期かとはかり、ご自身でもお覚悟される時が多いのであつたが、いつのまにか、月日が積もってしまったのも、夢のような気ばかりがする。中宮なども、お忘れになる時の間もなく、恋い慕つていらつしやる。

